

【研究ノート】

授業における人材開発過程の質的研究（４）

——人材開発論の受講生の TEA 図とレポートを中心として——

加 藤 雄 士

要 旨

本研究は、大学院の人材開発論の授業における人材開発過程の質的研究を目的とする。人材開発過程のメタ学習を目的として 8 人の受講生に作成させた TEA 図とレポートの抜粋を紹介し、それらをもとに比較考察する。フラクタル心理学を活用した人材開発により、親子関係をふりかえり、両親の見方や家族関係が変化した受講生の様子などを考察した。

I はじめに

本稿は、会計大学院の人材開発論の授業における受講生の人材開発過程を質的に研究するものである。具体的には、2019年度を受講生 6 人を対象とした研究（加藤，2020a，2020b），2020年度を受講生 6 人を対象とした研究（加藤，2021）を踏襲し，2021年度を受講生 9 人のうち掲載許可の得られた 8 人が作成した人材開発過程の TEA（複線径路等至性アプローチ：Trajectory Equifinality Approach）¹⁾ 図とレポートを抜粋して紹介し，比較考察する。結論を先取りするようだが，本年度の授業では，ゲスト講師の一色真宇からの助言に刺激をうけて，6 人以上の受講生が家族との関係を深くふりかえり，2 人の受講生は家族関係が大きく変化したことが確認できた。また，家族への接し方が変化した受講生も複数いた。さらに，受講生の人材開発に対する取り組みは，受講生のその時点での「アダルト脳」の成長度合いにより，大きく差が出るという点も考察できた。

II 人材開発論の授業の内容と進め方

本章では，本授業の受講生，講師，授業の意図，内容，方法，回数，進め方，テキスト，課題などについて紹介する。

1 本授業の受講生、講師、授業の意図

今回の人材開発論の授業は、2021年に関西学院大学経営戦略研究科会計大学院において、9人の受講生に対して行われた。当該科目を担当した筆者に加え、第2、4、7回の授業には、ゲスト講師の一色真宇（フラクタル心理学開発者）も登壇した。本授業は、受講生自身の体験を通して、人材開発のプロセスとその本質、および自己開発こそ他者開発につながることを理解させることを意図しており、フラクタル心理学を中心に授業を進めた。

2 本授業の授業内容、方法と回数

シラバスに掲載された本授業の授業目的、到達目標、授業方法などは2019～2020年度のものと同じ（加藤，2020b 参照）である。また、本授業は、全7回（1回200分の授業、土曜日13時20分～16時40分）全てオンライン授業（オンライン会議ソフトである Zoom を活用）で行われた。各回の授業は以下のように進行した。録画した補講授業（合計約260分）も提供した（図表1参照）。

図表1 各回（本授業は1回200分）および補講動画の内容

設定回数	年月日	主な講義の内容
1回目	2021年6月5日	シラバスの説明、受講生の自己紹介、過去の受講生の TEA 図の解説、フラクタル心理学の理論的考察、一色先生の紹介
2回目	2021年6月19日	(ゲスト講師 一色真宇による授業) グループ・カウンセリング、テキスト（基本的な考え方、基本講義①-1～4）
3回目	2021年6月26日	意味付け、昨年の受講生の TEA 図解説、テキスト（基本講義①-4～7）、誘導瞑想（言うことを聞いてくれない）
補講動画	2021年6月26日	(60分) テキスト（基本講義①-8～12）、フラクタル心理学の理論的考察、誘導瞑想（言うことを聞いてくれない）
4回目	2021年7月3日	(ゲスト講師 一色真宇による授業) グループカウンセリング、テキスト（基本講義②-1、2）、誘導瞑想（能力を増やす）、質疑応答
補講動画	2021年7月4日	(80分) 過去の受講生の TEA 図、テキスト（基本講義②-3、4）、成功者の「思考法」、内観法の解説、TEA 図の作成法
補講動画	2021年7月8日	(40分) フラクタル心理学（マンデルブロウ集合）、人材開発構造解説、テキスト（基本講義②-5、6）
5回目	2021年7月10日	自主グループ・ワーク（3人1組で相互インタビューを実施し、TEA 図を作成する）
6回目	2021年7月17日	テキスト（基本講義②-7～9）、誘導瞑想（～された）
補講動画	2021年7月19日	(80分) 誘導瞑想（信じ込み）
7回目	2021年7月24日	(ゲスト講師 一色真宇による授業) グループカウンセリング、テキスト（基本講義②-10～12）、LDP

3 授業の進め方、テキスト、課題、TEA 図とレポート

本授業は主に筆者がテキストを使って授業を担当し、ゲスト講師の一色は主にグループカウンセリングを中心に授業を進めた。3～7回目の授業は誘導瞑想のエクササイズが行

われた²⁾。授業と授業の間には毎回の授業についてのアンケートをLUNA³⁾に投稿すること（講師および全受講生宛てに）を求めた。アンケートの質問は、2019年度のもの（加藤2020b参照）と類似した内容であった。授業終了後には、本人と他の受講生（任意で1人を選ぶ）の2枚のTEA図を作成させ、それらをもとにレポートを執筆させた。

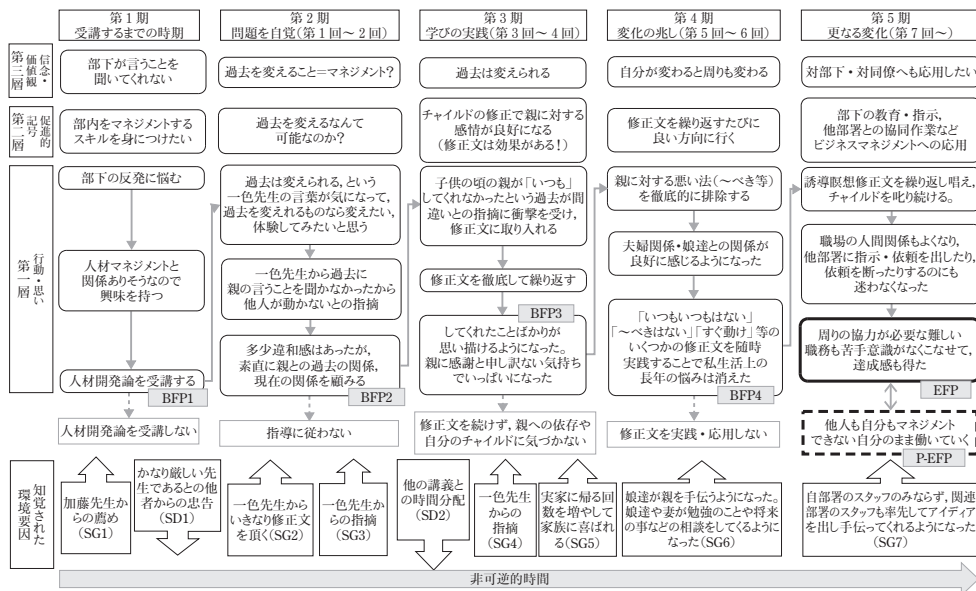
Ⅲ 受講生のTEA図とレポートの抜粋からの考察

本章では、掲載の許可を得られた受講生8人が作成したTEA図とレポートの抜粋⁴⁾を紹介し、考察する。

1 受講生AのTEA図とレポートからの考察

受講生A（50代，社会人）のTEA図とレポートの抜粋を掲載する。

図表2 受講生AのTEA図



(1) 第1期（受講するまでの時期），第2期（受講を始めてから，問題を自覚する期）

私は、思ったように部下や他部署のスタッフが動いてくれないという悩みを抱えており、何かの「解」を期待して履修登録した。一色先生の「過去は変えられる」という言葉の意味と方法を知りたいと思っていた。長年、何かうまくいかないことがあると、親が「いつもいつもこうしてくれなかった」、「こうしてくれればよかったのに」といった感情に襲わ

れる悩みを抱えていた。一色先生は、私が少し話をしただけなのに、「親の言うことを聞けなかったから、人が動かないのです」と言い、いきなり修正文をくださった。多少違和感があったが、素直に言うことを聞いてみようと思った。

(2) 第3期 (学びの実践期)

ある授業で、加藤先生が言った「いつもいつも」は「ない」という言葉が、私の心に刺さった。今までの私は、「いつも親父はいいアドバイスをくれなかった」、「いつも母親は分かってくれなかった」というように、「いつも～してくれなかった」という怒涛のような過去の思いによく襲われた。例えば、仕事の手が空くと、頭の中が昔の人生の岐路・選択の記憶に襲われ、それを親のせいにするのがあった。「なんで〇〇大学を勧めてくれなかったのだろう」とか、「なんで□□会社みたいな会社に入社するのを止めてくれなかったのだろう」とか、「いつもいつもつまらない方向にアドバイスしてわたしの足を引っばるのだ」という恐ろしく幼稚な恨み、つらみである。が、その言葉を聞いて、魔法のように氷解するのを感じた。早速、「いつもいつも～ない」じゃないどころか、「いつもいつも～してくれた」というのを修正文として取り入れ、ちょっと嫌な思い出が想起されるたびに一つ覚えのように唱えるようにした。最初は一日に何回も唱えないといけなかった。修正文を唱えることで、両親がいつもわたしに選択をさせ、好きなようにさせてくれたことが思い起こされた。記憶をたどると父親が堅実な会社を勧めてくれたのに、転職する羽目になったのも自分のせいであった。そんな私を両親は小さい子供の頃と変わらず受け入れて再起させてくれた。一週間もしないうちに、してくれたことばかりが思い出されるようになり、親に対して感謝と申し訳ない気持ちでいっぱいになった。これが「過去は変えられる」ということなのかと会得した思いがあった。今では、親のことを考えたり、親に会ったりすると、色々してくれた過去が思い出される。つまり、過去は変わったのである。

(3) 第4期 (変化の兆しの期)、第5期 (更なる変化、マネジメントへの応用の期)

過去の修正に加え、親に対する「親は子供のために完璧な判断をしてアドバイスしないといけない」とか「親夫婦が仲の良いところを見せなくてはいけない」といった「法」を徹底的に排除することにした。これにより、不思議と親との関係だけでなく、夫婦関係、子供達との関係も良好になった。「いつもいつもはない」、「～べきはない」、「すぐ動け」等の修正文を繰り返すことでイライラしなくなり、私生活上の悩みは著しく改善された。

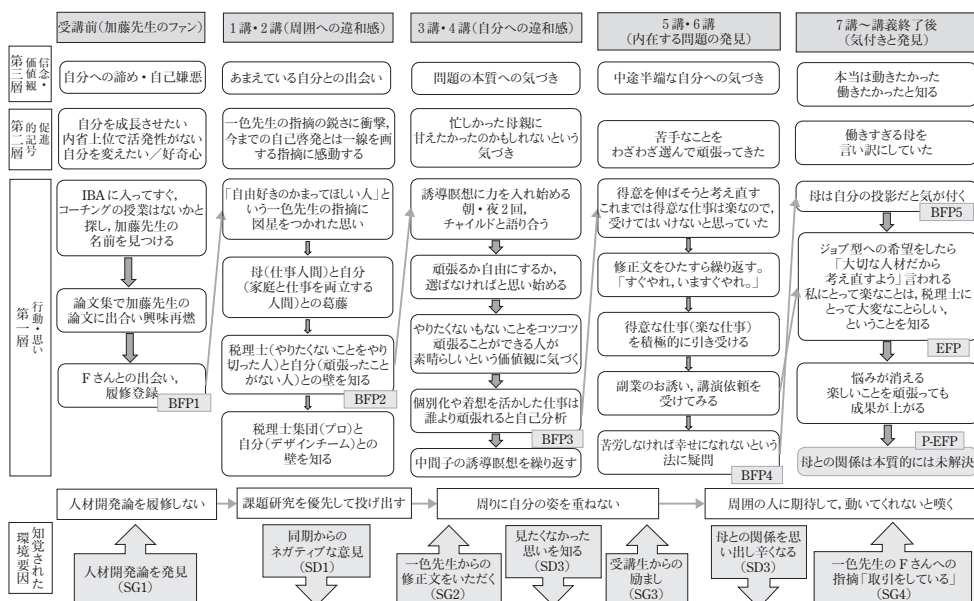
私生活上の問題が片付いたが、本来の目的であった仕事上の関係者への応用が残っていた。これに関しては、「やりたくない仕事を後回しにしない」、「結果と達成感にこだわる」、

「言葉でなく行動が大事」ということ（一色先生と加藤先生の言葉からの気づき）を意識して修正文を実行した結果のせいか、職場の人間関係も良くなっていった。修正文の効果かもしれない。自分で率先して、部下や他部署に指示・依頼を出したり、他部署からの依頼を他に廻したりといったことが躊躇なくできるようになった。その結果、難しい仕事もポジティブに取り組めるようになった。

2 受講生 B の TEA 図とレポート

受講生 B（40代，社会人）の TEA 図とレポートの抜粋を掲載する。

図表 3 受講生 B の TEA 図



私は子供の頃、母から「汚い」と言われた記憶を持っています。この言葉は、私自身に対してではなく、私が汚してしまった服を見て彼女が反動的に発したものです。ただ、あまりの態度に驚き、もともと好きでもなかった母を完全に嫌うようになってきました。母が働いて稼いだお金を私たちのためにたくさん使ってくれていたことは知っていました。彼女が貧しい家を出で、学校に行きたくても行けなかったことも祖母から聞いていました。祖母はいつも「ばあちゃん、お母さんを学校に行かせてやれなかったけど、お母さんはあなたたちを学校に行かせてあげて偉い」と言っており、働いてお金を稼ぐのは彼女なりの愛情表現だとも分かっていました。でも、運動会にも来ない、私自身の結婚式の日程も「その日は仕事だから変更して」などと言う仕事の鬼たる母を見て、「何もそこまで働かな

くても」という思いも抱えていました。お金はありがたいけれども、子供を最優先にすべきだろうという思いを募らせて成長しました。「こんな母親は嫌だな」、「私は子供を持ったら、家に入れるお母さんになりたい」という思いを抱えていました。

その一方で、「親を嫌うのは良くない」という私の「法」もあり、「好きにならねば」と苦しみ続けました。小さな娘を見るたび、「よくもまあ、こんなに小さな子を預けっぱなしにして働くことを優先し続けたな」と苦しみが募りました。私は、会社にも娘を連れていき、母乳で育てました。出張の際は、娘が2歳になるまでは出張先の近くの託児所に預け、仕事が終わると一緒に帰って来るということを繰り返していました。私は母とは違う子育てをしながら（反発をしつつ）、母のことを好きにならねばと苦しみました。

そんなことを繰り返している時期が長く、とうとう鬱になってしまいました。医師から「親だからといって大好きになる必要はないのではないか」という助言を受け、そう思うようにしました。子供が2人になってからは、ハイペースで働くことができなくなり、仕事をセーブし、ゆったり働きつつキャリアも捨てないという「ゆるキャリ」を目指すことにしました。母のことは、許すのではなく、心の中で捨てることにしました。そうすると鬱的な症状はなくなり、少し落ち着くことができました。けれども、フラクタル心理学では親に感謝の電話をしなければいけないようなことを言われますので、私はまた苦しみの中に突き落とされてしまいました。ようやく手に入れた私の心の安寧がまた壊されてしまったような感じでした。私にとって「母を好きになること」は苦しいことでした。

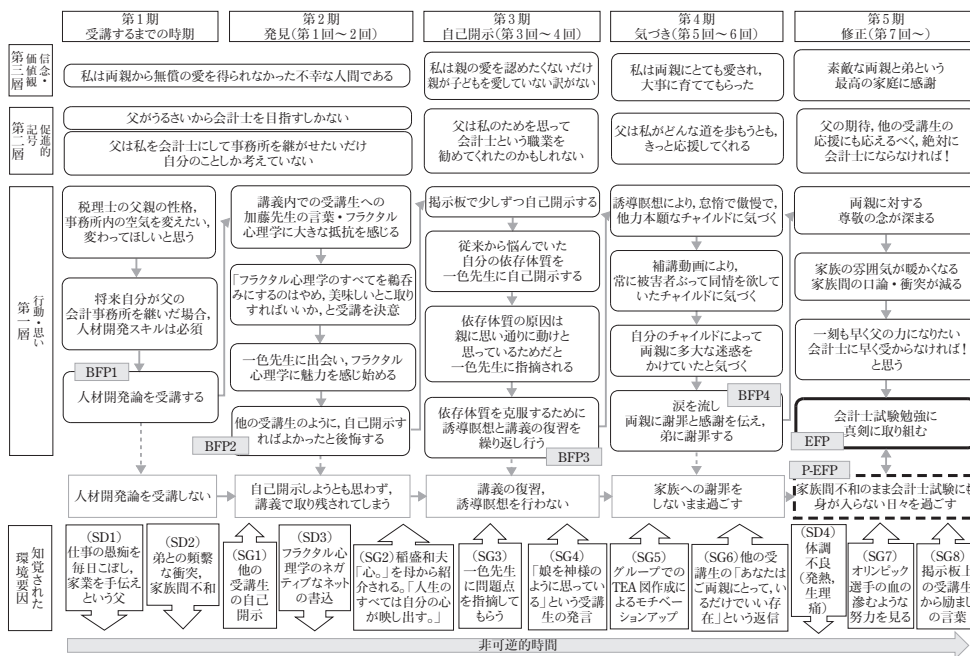
また、授業で高齢者虐待や子どもの虐待に興味があると言ったとき、「働かざるもの食うべからずという思想があって、あなたは、それができていないから、この問題が気になるのよ」と一色先生は指摘されました。愕然としました。そういえば母は、かなり稼ぐ人で、私はそれができておらず、引け目を感じていました。その想いが私に、「高齢者や子供を救え」とおこがましい思いをもたせていたのでしょうか。

「母のことを好きにならないといけないけれどできない」とか、「忙しすぎた母が嫌。子供たちに、かわいそうな自分のように感じさせたくないから、在宅ワーカーを選んで」という理由で私はとじこもっていました。そのくせ、「本当は活躍できるのに」と思っていました。「わがままな中間子」という一色先生の指摘も、私には刺さりました。そのとおりです。そもそも子供たちはもう14歳と9歳です。私が働きに出ても問題ないのです。母の至らなかった点にだけ焦点を当て、深層意識の言い訳を作り出していました。今回の授業を受けて考え抜いた結果、とにかく先に行動をしようという思いに至って涙を流しました。一色先生から、「かまってほしい」けど「自由が好きな中間子」という指摘を受けて、覚悟が決まった感じです。行動していたら思わぬことが次々と起きています。

3 受講生 C の TEA 図とレポートからの考察

受講生 C（20代、純学生）の TEA 図とレポートの抜粋を掲載する。

図表 4 受講生 C の TEA 図



(1) 第1期（人材開発論を受講するまでの時期）、第2期（第1、2回目）

将来自分が父の事務所を継ぐと考えた時に、人材開発（他人や部下を開発するスキル）は自分に間違いなく必要なものであると思ひ、履修登録に至った。第1回目の加藤先生の授業は、共感できたり、興味深く拝聴できた反面、大きな抵抗を感じた部分があった。ある受講生の悩みに対して、「それはあなたの投影なんですよ」と先生は言った。その一言に私は大きな抵抗感を覚えた。その受講生の職場の環境も、その悩みの種である職員のことを何も聞こうとも知ろうともせず、そのように決めつけの言葉で片付けるのは、あまりにも軽率、その受講生に対しても失礼ではないだろうか。このような抵抗感を強く感じ、憤慨している自分がいた。

第2回目の授業では、一色先生が受講生の悩みなどを聞いてくれる機会があった。私は、初対面の一色先生に対して緊張し、自己開示する気になれなかったため、当たり障りのないことしか話すことができなかった。その一方で、悩みや自分の状況をしっかりと自己開示した受講生は先生から様々な指摘や解決策を提示してもらっていた。これを見て、授業の終盤、「私ももっと自己開示していれば」と心の底から後悔した。

(2) 第3期(第3, 4回目), 第4期(第5, 6回目)

「この場は安心、何でも話そう」という感覚が確固たるものとなり、ついに第4回目の授業で、自分が長い間悩んでいた依存体質について一色先生に自己開示することができた。授業後、一色先生から受講生一人ひとりに合った誘導瞑想の動画が複数提示された。その一つである「他力本願をやめる」という誘導瞑想を寝る前に毎晩聴いた。また、この授業で一色先生が私にアドバイスしてくださっている箇所を日常生活の隙間時間に10回以上繰り返し聴いた。第4回目の授業では他の受講生もさらに深く自己開示し、受講生の一人が「娘のことを神様のように思っているんです。」と打ち明けた言葉が、私に突き刺さった。この話を聞いて、父が今まで何度も何度も私が生まれた時の話をしてくれていたことを思い出した。父はいつも「お前が生まれた時は感動して、嬉しくて、涙が出た。」と話してくれていた。父も、母も、もしかしたら私のことを神様のように思ってくれているのではないのだろうかと考え、授業中にもかかわらず涙がこぼれそうになった。この受講生のお話は、長い間、悩みの種であった家族間不和を解消するのに大きな影響を及ぼした。

第4期(第5, 第6回目)中は誘導瞑想を繰り返し行い、「わがままな家族に苦しんで、解決法が見つからないあなたに捧ぐ誘導瞑想」の動画も聴いてみた。恥ずかしながら、この誘導瞑想を聴くまで、自分の怠惰で、傲慢で、わがままなチャイルドに気づいていなかった。

第5回目の授業後の補講動画の内容は、私にとって本当に苦しいものだった。その中で私自身に最も影響を及ぼしたのは「被害者であることのメリット」の話だった。被害者でいると、可哀想な子としてみんなに同情してもらえるし、頑張らなくていいよ、と言ってもらえる。被害者は可哀想で不幸な自分は大人気なのだという。あまりにも心当たりがありすぎて、自分のことを言われているのではないかと少し怖くなった。私はずっと、自分の欠点を両親、特に父親のせいにして、周囲に同情してもらおうとしていた。思い返せば大学生の頃から「こんな家庭で育ったのに非行に走ることもなく、まっすぐ育っただけマシな方だ。だから私はこれ以上頑張る必要なんかない。」と思っていた。実際、友人に上記の言葉をかけられたこともある。しかし、この思考の型の大きな間違いに気づくことができた。この思考は全て「穴掘り」でしかない。自分が様々なことの言い訳に不幸で可哀想な被害者の自分を装っていたことに気づくと同時に、その不幸の材料として家庭環境を言い訳にしていたことにも気づくことができた。

あるメッセージを掲示板に投稿したところ、受講生の一人から「Cさんは、ご両親にとって、いるだけでいい存在です。でも、笑ってくれたり幸せになってくれたら、ご両親も笑うし、幸せになると思います。」と言ってもらった。これを初めて読んだ時、思わず泣いてしまった。彼女の言う通り、確かに両親はそう思ってくれている。どうして他人に

言われるまで両親の愛に気づけなかったのだろうか。それからほとんど拍子に進んでいった。数日後、両親と私が弟の生活態度や家族に対する態度の悪さについて話し合う機会があった。弟について話しているうちに、両親に対して感謝の言葉が溢れ出た。そして、これまでたくさん迷惑をかけたことについて、自然と涙を流しながら謝罪することができた。これを聞いて両親も涙を流して応えてくれ、何年ぶりか分からないくらい久々に父と抱擁を交わすことができた。それから数日後、弟にも思い切って謝ってみた。謝った直後の弟の反応は薄く、あまり手応えがないと思ったが、その日から弟との関係が大きく改善し、日常的な会話を交わすようになった。ここ数年、険悪な雰囲気の流れていたが、お互い思いやりを持って接することができるようになった。これは非常に大きな変化であった。

（３）第５期（第７回目、授業終了後）

両親に謝罪をした後、両親に対する尊敬の念が深まった。今まで母がやって当たり前だと思っていたことは、母の私たちに対する愛があってこそそののだとわかり、母の偉大さを知った。父はずっと自己中心的で嫌な人だと思っていたが、何をするにも私たち姉弟のことを考えてくれていたのだと知った。いかに自分が愛され、素敵な家庭で、大事に育てられてきたのかを知った。そして、弟の態度も改善されたせいか、家族間の衝突や口論がグッと減った。母も、イライラすると八つ当たりしたり、わめき散らしていたのがパタリと止んだ。父の職場の愚痴や従業員の悪口も減ったように思う。家庭の雰囲気が大幅に改善され、両親の何物にも変え難い素晴らしい愛情に気づいた私が次に感じたのは、「一刻も早く父の力になりたい」というものだった。

４ 受講生 D の TEA 図とレポートからの考察

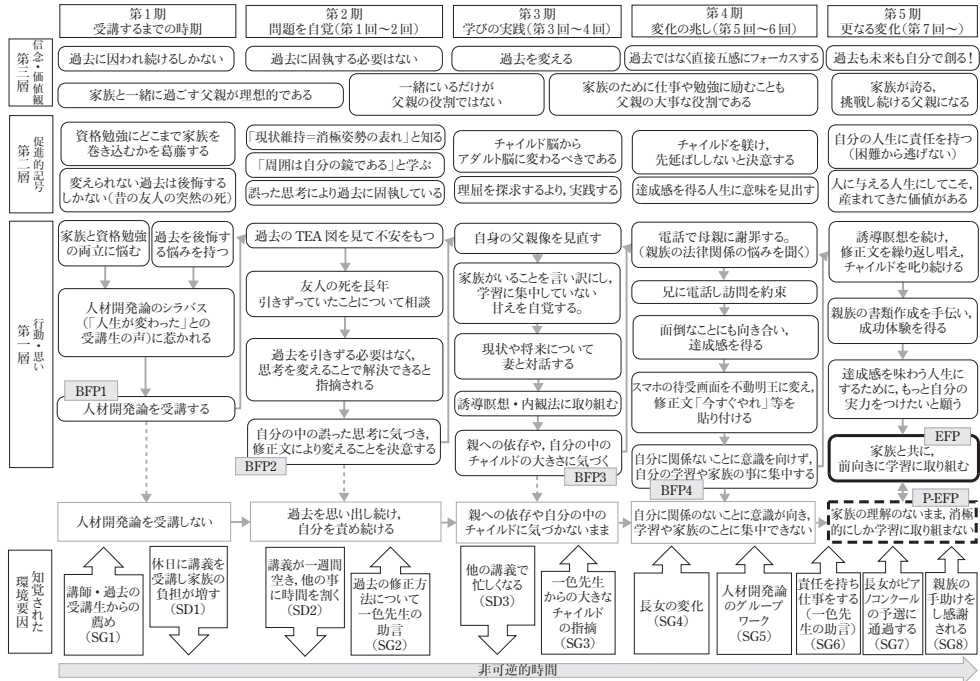
受講生 D（30代、社会人）の TEA 図とレポートの抜粋を掲載する。

（１）第１期（受講するまでの時期）、第２期（問題を自覚）

人材開発論を受講する前の私は２つの大きな悩みを自覚していた。１つ目は、資格勉強と家族との時間の両立である。２つ目は、過去を後悔することである。特に典型的だったのが、10年ほど前に、友人が突然自死という形で亡くなり、あの時もっと違う対応をしていれば結果は変わったかもしれないと何度も後悔してしまうことであった。過去の出来事であり意味がないと思っても、気がつけば何度も反芻している自分に半ば諦めに似た思いがあった。

第２回目の授業で一色先生が登壇され、カウンセリングを中心とした授業となった。他の受講生が悩みをどんどん自己開示し、それに対して的確に鋭い指摘やアドバイスをされ

図表 5 受講生 D の TEA 図



ている姿に驚き、自分も悩みを開示しないと前に進まないと思った。そのため、普段考え
ている家庭の悩みのほか、相談できないと思っていた友人の死についても思い切って相談
してみた。一色先生からは、友人の死を悼み続けるのには何か別のところで根本的な原因
があると指摘された。いつまでも友人の死を悼む必要などなく、自分の中で誤った「法」
を解消すると悩みは解消されると言われ、修正方法として修正文をもらった。思い切って
打ち明けたことから気持ちも軽くなり、これで解決できるならば、という思いから、早速、
修正文により自分の思考の修正にとりかかることにした。

(2) 第3期(学びの実践), 第4期(変化の兆し)

フラクタル心理学の内容は、既知の内容に類似する点が多いものの、「周囲は自分の鏡」
であり、かつ「それは100%例外ない」といった、更に踏み込んだものでもあった。その
ため、理解はできるがすぐには納得できない自分がいた。その時、加藤先生から「理解を
待っていたら、人生が終わってしまう」という趣旨の話聞き、そのとおりだと妙に納得
した。この頃から、十分に理解できなくともまず誘導瞑想や修正文を実践していこうと決
心した。また、内観法の手法により、自分が子供を持つ年齢になっても、親に依存し続け
ていることに気づき、なんとか修正しなければいけないと思うようになった。このことは、

色々な理由をつけできないことを言い訳している自分の中のチャイルドの大きさを痛感することにも通じると考えた。このように、親への依存やチャイルドの大きさを認識することは一つの転換点となり、一刻も早くチャイルド脳を解消していこうと考えた。

第Ⅳ期では、誘導瞑想の動画を視聴することや修正文を唱えて日々を過ごした。何かきっかけがないとできないと言い訳し、先延ばしにしていた親への謝罪も、電話で感謝の気持ちとともに伝えた。この頃、小学２年生の長女が、自ら目覚まし時計を設定し、早起きして自習をするほか、自分から英会話をやってみたいと言うようになった。また、習っているピアノも学校から帰って自主的に練習するようになった。

両親ばかりではなく、兄との関係も見つめ直すべきだと気づき、久しく連絡していなかった兄に連絡し訪問する約束をした。また、両親や兄に連絡をとる過程で、これまで面倒なことを先延ばしにしていた自分のチャイルドを自覚した。このチャイルドを躰けるため、加藤先生から教えてもらった、修正文「今すぐやれ！甘えるな！」等を携帯の待ち受けに貼り、意識するようになった。それまでは、「時間がない」などと口にする一方で、周囲のニュースについて関心を寄せる自分がいたが、フラクタル心理学の「直接五感で感じることにフォーカスする」という教えを聞いてからは、直接自分に関係がないことに必要以上に関心を寄せないように心がけるようになった。すると、学習や家族のことに時間を割くことができ、集中力が増したように感じた。

（３）第５期（更なる変化）

この頃には、あれほど何度も考えていた友人の死について振り返る機会が激減し、悩んでいたことも忘れるくらいの変化が生じていた。友人が亡くなった事実は変えられないが、冷静に受け止めることができ、少なくとも頭の中で反芻しなくなった。周囲の変化としては、長女がピアノコンクールの一次予選に通過し、次の二次予選も頑張るとやる気になった。妻と二人で練習を続ける姿は大きな刺激となり、自分も現状維持に甘えず、挑戦していこうという気持ちになった。授業を受講して、過去のトラウマからの解放、先延ばしにせずにとりかかると姿勢など、内面で大きな収穫があったと実感している。

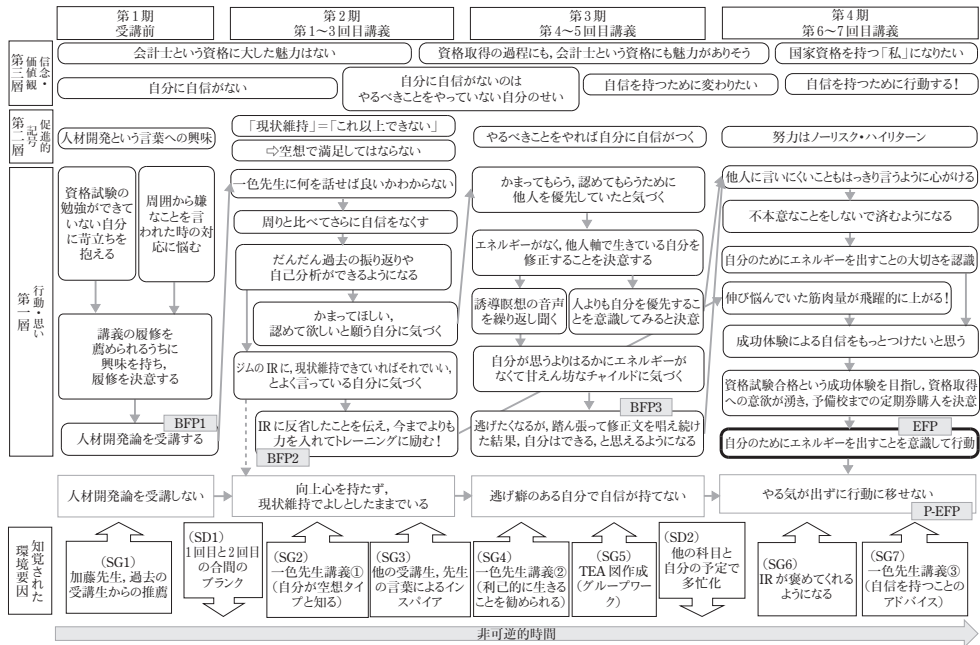
５ 受講生 E の TEA 図とレポートからの考察

受講生 E（20代、純学生）の TEA 図とレポートの抜粋を掲載する。

（１）第１期（受講前）、第２期（第１～第３回）

親から言われるままに公認会計士の資格取得を目指して会計大学院に入学し、専門学校にも通学し始めた。しかし公認会計士になりたいという強い思いが私自身になく、その資

図表6 受講生EのTEA図



格に特別な魅力を感じる事が出来ないまま、無気力気味な日々を過ごしていた。大学院でも専門学校でも周りに優秀な人が多く、彼らと比較して自信をなくすことが多くなっていた。

第2回目の授業で一色先生に自己紹介をすると、私が空想好きで、なんでも空想の世界でストーリーを完結し欲望を満たして満足してしまうため、現実世界で欲望を持つことや欲望を叶えることをしていないという指摘を受けた。授業やLUNAの掲示板などの言葉からも自分自身を見つめ直すヒントをもらい、「かまってほしい、認めてほしいと願う自分」と「現状維持できていればそれでいいと言う自分」に気づくことができた。

第3回目の授業において、「現状維持」は「これ以上できない」という言葉の言い換えであることに気づいた。また、ジムで「現状維持できている！退化していないからすごい！」とインストラクターに無意識のうちに口に出していた自分に気づいた。ちょうどこの数ヶ月、食事面からも運動面からも筋肉量が増えるはずだったが全く変化がなく、私もインストラクターも首を傾げていた。フラクタル心理学では、思考が現実化するという。筋肉量が増えないのは自分の思考が原因なのではと思い、意識を変えてトレーニングに励むようにした。「現状維持できている！」と私が言う度にインストラクターが呆れたような顔をしていたことも思い出し、今まで何故呆れられているのか気づいていなかった自分を恥じた。

(2) 第3期(第4～第5回), 第4期(第6～第7回)

かまってほしいと願う自分とそれに矛盾するような行動をする自分について一色先生に相談をした結果、私には「生きるエネルギーが足りていないこと」、「他人軸で生きていること」を指摘された。子供の頃、だれかにかまってほしいというアピールをしなかったように、自分で欲望を叶えようとせず、自分のために努力ができていなかった。それなのに他人のためだったら自分を犠牲にしてでも頑張っている自分に気づいた。他人軸ではなく自分のために自分の人生を全力で生きてみたいと思い、一色先生から薦められた誘導瞑想の動画の音声を繰り返し聞き、他人よりも自分を優先することを決意した。

「誘導瞑想」の音声では、エネルギーがなくて甘えん坊なチャイルドをズバズバと指摘された。今まで目をそらし続け、さらには気づいていなかった嫌な自分と向き合うことに感情が揺さぶられ、逃げ出したくなった。2日ほど聞くことから逃避したものの、就寝前に繰り返し聞き続けた。その結果、「もう十分エネルギーを溜め込んだから自分はもうできる」、「大きくなったアダルトな自分がチャイルドについているから安心して挑戦できる」と思えるようになった。第5回目の授業では、TEA図作成のグループワークに取り組んだ。お互いにインタビューし合うことで二人に対し共感や尊敬といった思いがますます湧き、人材開発論で自分を変えたいという思いが強くなった(以上、第Ⅲ期)。

普段仲の良い友達に対しても、自分を優先させることや自我を通すようなことはなかなか言えずに多少のモヤモヤを抱えてしまうことがあった。だが、「利己的」を意識し勇気を出して自分の思いをはっきり伝えてみると、意外と相手も嫌な顔をせずにすんなり受け入れてくれることに気づいた。また、ジムで月1回の身体測定をしたところ、停滞していた筋肉量の数値が突き抜けるように上がっていた。自分の意識(=思考)を変えるだけでこんなにも変化するのかと驚くとともに、久しぶりに成功体験を通じて達成感を得ることができ、気持ちの良さを感じた。インストラクターも「向上心を持ち続けると変化もちゃんと起きますね」と褒めてくれた。また、授業で私の心に響いたのは、公認会計士という資格よりも資格を取る過程で努力し、競争に打ち勝って合格することで達成感を味わうことの素晴らしさである。エネルギーを出すことの大切さを学んだ今、何事も自分のためにエネルギーを出すことを意識して取り組み、達成感を得ようと思う(以上、第Ⅳ期)。

6 受講生FのTEA図とレポートからの抜粋

受講生F(40代, 社会人)のTEA図とレポートの抜粋を掲載する。

(1) 第1期(受講前), 第2期(第1, 第2回目)

第1回目の授業では、受講動機など自己紹介の後、人材開発論の導入部分について学習

図表7 受講生FのTEA図



した。「理由をつけて動かない職場を変えたい」という受講動機を話したところ、加藤先生から「その職場はFさんの投影ではないか」との指摘を受けて、心の中でかなり反発した。「私が悩んでいる職場の体たらくは本当にひどいもので、先生はそれを知らないくせに、私の投影だとはいひどい」と思った。また、自分の意識を変えると、周囲の人は変化して、職場も変わるということがイメージできなかつた。ただし、「帳尻を合わせる生き方を変えたい」というような、自分のネガティブな面に対しての問題意識は持っていた。

第2回目の授業では率直に「職場が自分の投影であるという考えが理解できない」と述べたところ「あんなにひどくないという思いは現象学のフィルムとスクリーンであり、大きさを比べるのをやめるべき」という指摘を一色先生からもらい、「職場は自らの投影」という考え方を受け入れられるようになった。また、「責められていると思っている時は、自分自身で誤りには気づいており、それを認められないから反発している」、「怒りのパワーは開示しやすく、罪悪感の開示しにくい」という指摘もいただいた。今から考えると、加藤先生、一色先生とも私が認めている度合いに応じて話を進めていただいたのだと思う。

(2) 第3期 (第3～第5回)

「敵には見抜かれている」という話は、この後の授業の過程で自分にずっと響いていく。第4回目の授業は、一色先生に表層意識と深層意識の対立について質問した。「表層意識でしようと思っているのにできないと言う時、深層意識ではそれを望んでいないのではな

いか」というお話くださった際、自分にとって的中していることを見抜かれて辛い気持ちになった。このあたりから、自分の甘い嫌な部分がはっきり見え始めた。

実は私にとって親と向き合うのは非常に難しいことだった。父は私が中学校に進学したあたりからいつも夜飲み歩き、母は父が帰るまで寝ず、毎晩のように母が父を論じていた。酔った父が説教をしてくる母に反発して、取っ組み合いのけんかになることもあった。そんな父だが、朝の3時、4時に帰宅しても、毎日のように6時半に出勤していたのは驚きだった。反抗期でもあった私は母の注意に対して反発することも多く、特に気に入らない時は怒鳴ることもあった。そんなことから母は私に対して叱ることもなくなった。ある意味、私の天下であった。母は無理を重ねたせいか、私が高校三年生の時、他界した。私は「この家を早く出て行きたい」と言っていたが、彼女は病の床でうなされながら、「息子が行ってしまう」と言うこともあった。亡くなってから、不孝を詫びることすらできないことの重さを実感し、謝罪してもしきれない思いでいっぱいだった。

父は自分が経済的理由で大学進学できなかったことなどから、私には大学を出て欲しいとの思いが強く、学費だけは納入してくれた。しかし、大学在学中も父とのケンカは絶えず、何度か「誰が大学に行かせてやっているんだ！」と言われ、3回生の時に、「そこまで言うのなら」と勝手に怒って家を出て就職し、中退扱いとなった。かなり後から知ったことだが、父は私が勝手に家を出て行ってから1年間学費を納め続けていた。

紆余曲折を経て、2010年に大学院を修了した。自分で学費を出したことで、親のしてくれていたことも少し分かった。卒業式に父を呼んだが、「おめでとう」、「ありがとう」という、色々言いたいけれど素直に語れない会話をしたことを記憶している。それ以後も、お互い過去には触れず、微妙な距離感でつきあうことがこの10年間続いている。

(3) 第4期(第6回)、第5期(第7回、授業終了後)

第6回目の授業での「とりあえず期限に間に合い、なんとかなってきた」という私の発言に対し、「なんとかなっていると思っていたんだ!？」と加藤先生から指摘された。「いろんなものを引き受けてしまうので、タスクがおしてしまう」という発言にも、「怠慢です」と指摘される。「間に合うよう頑張っているのに」、「善意で多くのことを引き受けているのにどうして怠慢なのか」と、一瞬、反発の感情が沸き上がる。前者については、「期限に間に合う」ということが穴掘りの達成感であることがすぐに自覚できた。後者はすぐには理解できなかったが、結局一つひとつのタスクを高いレベルで解決できていないこと、言い訳のためにいろいろなものを引き受けていることに気づいた。自分の心はしっかり先生に見抜かれていた。職場で指摘をする時にも、自分自身、至らざる面があるという自覚はあるので、遠慮がちに「私も褒められたものではないですけど、職場のこのあり

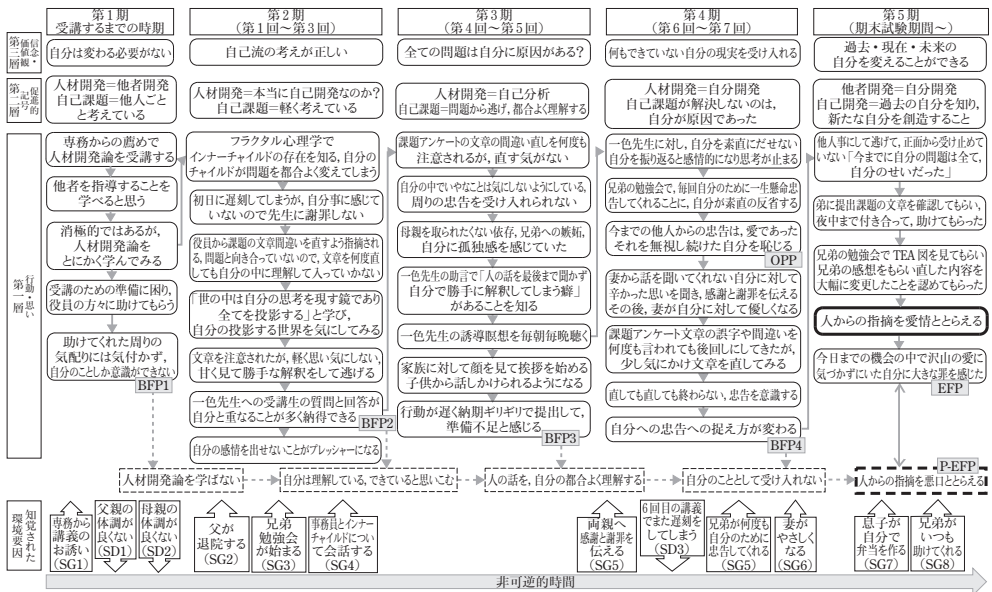
方はちょっと酷すぎるのではないですか」と言うことがある。自分自身がしっかりやりきっているという自信に裏付けられて行動しているわけではない、穴掘りの達成感丸しであった。

第7回目の授業で、「裏切られた時、被害者意識を持たないとしても、再度裏切ってくる人もいるがどう対応すべきか」という質問を一色先生にしたところ、「裏切られたと
思っている時点で、あなたの頭の中には取引関係が見えている」との指摘を受けた。職場を変えたいという思いの中に、「職場にこう動いてほしい」というような相手に依存した感情があることにも気づいた。また、この時期に取り組んでいた大学院の課題研究も△△先生に直前まで見ていただき、期限に間に合うように提出することができた。「間に合ったんじゃない、間に合うように先生が指導して下さっただけなんだ」と改めて実感し情けなくなった。このような生き方を改め、より高いクオリティで、できるだけ早く仕事を済ませていかなければならないと改めて実感している。

7 受講生 G の TEA 図とレポートからの抜粋

受講生 G (40代, 社会人) の TEA 図とレポートの抜粋を掲載する。

図表 8 受講生 G の TEA 図



初回授業で出された課題の文章の誤りを先生から指摘されたが、自分の文章能力の低さを認められない上、甘く考えており、直さなかった。第2回目の授業で、一色先生への質問の際、自分の番になったが、固まってしまう全く会話ができなかった。自分を取り繕い、

きれいごとを言っている自分がいた。この頃、自分が授業で迷惑をかけ、恥をかかない様にするために、兄弟が業務終了後に勉強会を毎週水曜日に始めてくれた。その場でも兄弟から課題の文章をすぐに直すよう言われたが、直さずにいた。自分事を他人事にしていた。

兄弟から第3回目の課題の文章修正を催促されたが、直さなかった。自分自身の課題をまだ軽視していた。直すことの必要性等、相手の意図を考えていないので理解できなかったのだと思う。第4回目の授業で一色先生が登場され、先生への質問が繰り返された。受講生の空気感は前回とは違っていたが、今回もうまく自分を出せず、「悩みがないのでは」とまで先生に言われてしまった。また、「人の話を聞かず勝手に解釈してしまう癖がある」と言われ、一色先生の誘導假想の動画（人の話を聞かず、「大丈夫だよ」と言い張るあなたに捧ぐ）を毎朝毎晩聴くことにした。

第5回目の授業は、3人チームでTEA図の作成をした。約束した時間に3人で会うことができず、提出物が遅れがちで遅刻も多い3人の重なり合う部分があるように思った。兄弟の勉強会では、素直に行動することを受け入れない自分に対し何度も忠告された。兄と弟が「目の前の問題を解決することで成長できる」と自分に一生懸命説明してくれて、目が覚めた。周りの人々からの忠告がすべて愛であったと知り、無視し続けていた自分を恥じた。その後、今まで愛を与え続けてくれた両親に感謝と謝罪を伝えた。最後の課題も兄弟に手伝ってもらった。特に弟は夜中まで一緒に何度も確認してくれ、修正してくれた。兄弟から根気よく繰り返しもらい続けた愛情の結果、自分は大事なことに気づけた。

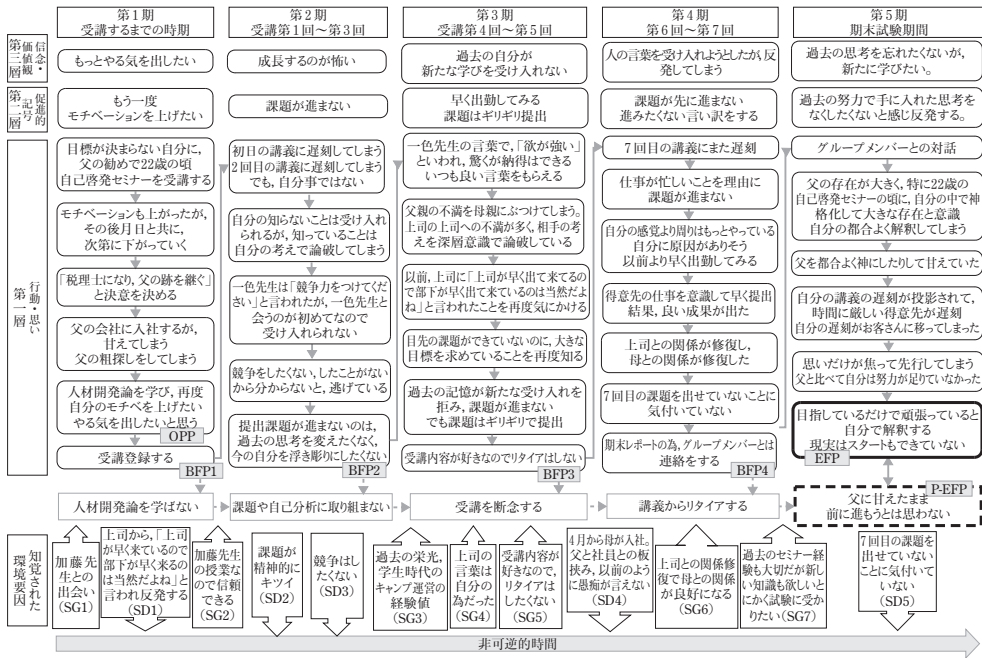
8 受講生HのTEA図とレポートからの抜粋

受講生H（30代、社会人）のTEA図とレポート（HさんのレポートとHさんをインタビューしたGさんのレポートを合わせたもの）の抜粋を掲載する。

人生の目標が決まらない22歳の頃、父親が勧めてくれた自己啓発セミナーを受講した。自分と向き合い、つらい思いをしながらモチベーションを上げ、その中で自分の目標を「税理士になり、父の後を継ぐ」と決めた。その後、父の会社に就職し、月日が経つにつれて、父に対する甘えがあり、無意識に父の粗探しをしてしまう自分をつらいと感じていた。その後、時間の経過につれモチベーションが徐々に下がり、現在に至っている。私には、「自分の知らないことは受け入れられるが、自分の知っていることは相手を論破してしまう」癖がある。また、第2回目の授業に一色先生が登場され、「競争力をつけてください」と言われたが、すぐにその言葉を受け入れられずにいた。競争はしたくない、競争したことがないから分からないと逃げた。

第4回目の授業で、一色先生から「欲が強い」と言われて驚くが、納得でき、一色先生への信頼度が徐々に上がった。また、父親の不満を母親にぶつけてしまうことがあり、自

図表 9 受講生 H の TEA 図



分の上司への不満が多かった。その上司と父が重なることもあった。「周りの先輩が早く出勤して来ているのであなたももっと早く出勤しなさい」とその上司に言われたが、体育会系のノリだと感じて反発した。自分なりに早く出勤していたつもりだが、上司の思いと違いがあったのかなと思う。

第5回目の授業はTEA図作成のためのチームインタビューだったが、チームの3人の予定が全く合わず進めることができなかった。目先の課題ができていないのに、大きな目標を求めている自分を以前から分かっていた。この授業の課題はいつもギリギリで提出し続けていた。第7回目の授業で、また遅刻してしまった。まだやるべきことができていないと思った。自分の感覚よりも周りのもっとやっていると感じるというのは、自分に原因がありそうと思った。父と比べて自分は努力が足りていないと思う。「父への依存が大きい、一歩ずつ前へ進んでいく」と今は考えている。

IV おわりに (考察)

本稿の目的は、2021年度の会計大学院の人材開発論の授業における受講生の人材開発過程の質的研究である。まず、第II章で、本授業の受講生、講師、授業内容、方法などについて説明した。続く第III章で、受講生8人のTEA図とレポートの一部を紹介した。受講

生A, B, C, D, F, Hの6人はゲスト講師の一色の助言に刺激を受け、両親との関係を深く見直したと書いている（図表10参照）。その後、AとCはその関係が良好になった様子が考察でき、DとHは、両親に依存し続けていることに気づいたと書いている（Bも同様と考察できる）。また、一部の受講生（A, C, D, G）は、授業期間中に両親に謝罪などをするこゝで、家族関係に変化が見られた。他の受講生も授業終了後に、両親との関係が変化し続けることが期待できる。本授業で導入したフラクタル心理学は、6歳までの自分の記憶を修正していくため、自然と両親の見方や家族関係が変化することが多い。

図表10 両親との関係のふりかえりと見方、他者との関わり、本人の変化

受講生	両親との関係のふりかえり	両親の見方の変化	他者との関わりの変化	本人の変化の例
A	両親との関係をふりかえった	両親の見方が180度変化した	家族関係は良好になる 職場の人間関係も良好になる	難しい仕事にもポジティブに取り組めるようになった
B	母との関係をふりかえった	(母との関係をふりかえりを通して自分の見方が変わった)	(特に言及なし)	覚悟が決まった感じ 行動する
C	両親との関係をふりかえった	両親の見方が180度変化した	家族間の関係が良好になる	一刻も早く父の力になりたいと思うようになった
D	両親との関係をふりかえった	(親へ依存し続けていることに気づいた)	長女が変化した	先延ばしせずすぐに取りかかる姿勢になった
E	(特に言及なし)	(特に言及なし)	(特に言及なし)	自分のためにエネルギーを出そうと思う
F	両親との関係をふりかえった	(直接的な言及なし)	(特に言及なし)	生き方を改めなければならぬと実感している
G	(特に言及なし)	愛を与え続けてくれたと感謝と謝罪	兄弟からの愛情に気づいた	自分は大事なことに気づけた
H	父との関係をふりかえった	父への依存が大きいと思う	(特に言及なし)	一歩ずつ前に進んでいくと考えている

なお、受講生D, Eは、自分自身の課題に取り組み、一定の成果（自身の行動変容）が得られたものと考察できる。さらに、受講生G, H（および今回レポートを掲載していないI）は、授業で課題の提出が遅れたり、遅刻が重なったり、他人からの指摘や忠告を受け入れられなかったことをレポートで書いている。そうした姿勢（フラクタル心理学のテキストに沿って分析すると、アダルト脳≒大脳新皮質の成長に課題があったといえる）が人材開発の取り組み（講師や周囲から言われたことに素直に従えないなど）や周囲の人間関係に反映されているものと考察する（図表11参照）。ただし、GとHのレポートからは自身の課題に気づいた様子も見られ、今現在もその開発は進んでいるものと期待する。

以上をまとめると、本年度の授業で、ゲスト講師の一色からの助言に刺激をうけて、家族との関係をふりかえったと書いている受講生が9人中6人いた。具体的に家族関係が変化した学生も4人以上いた。また、受講生の人材開発への取り組みや成果は、受講生のそ

図表11 受講生 G, H のレポートの記述の特徴

受講生	レポート上の記述	特徴
G	<ul style="list-style-type: none"> 講師や兄弟から誤りや修正の指摘を受けても直そうとしなかった 課題の提出が遅く、遅刻を複数回していた 	年長者や上司の忠告を受け入れられない
H	<ul style="list-style-type: none"> 上司からの指摘を受け入れられない 課題の提出はいつもギリギリ/また遅刻してしまった(第7回目の授業) 	上司の忠告を受け入れられず、父の粗探しをしよう

の時点でのアダルト脳の発達度合いにより大きく変わることも考察できた。

注

- 1) TEA とは、個人の人生径路を可視化する研究法や人間の態様をオープンシステムに基づき記述するための分析ツールである。
- 2) 2020年度の授業では第5回目から誘導瞑想を行ったが、2021年度は第3回目の授業から開始した。
- 3) LUNA とは、関西学院大学の学生と教員のための授業支援システム (LMS: Learning Management System) のことをいう。学生が掲示板などで課題を提出したり、自由な意見を交換したりするなど、教授者-学習者のコミュニケーションツールとして活用した。
- 4) TEA 図については、授業終了後からレポートの提出期限までの1週間前後に筆者がコメントし、受講生が納得した点のみ TEA 図の修正をした。レポートについては本人が提出したものを筆者が趣旨を変えない程度に修正、抜粋し、最終的に受講生に確認したうえで掲載した。

参 考 文 献

- 加藤雄士 (2020a) 「授業における人材開発過程の質的研究 (1) - 人材開発論の受講生の TEA 図とレポートを中心として -」『関西学院大産研論集』第47号。
- 加藤雄士 (2020b) 「授業における人材開発過程の質的研究 (2) - 人材開発論の受講生の TEA 図とレポートを中心として -」『ビジネス&アカウンティングレビュー』第25号。
- 加藤雄士 (2020c) 「授業における人材開発過程の質的研究 (3) - 人材開発論の受講生の TEA 図とレポートを中心として -」『ビジネス&アカウンティングレビュー』第26号。